

初めて完成する服作り 生きることを学ぶ



スズキタカユキ氏

服飾家

ファッションブランド「suzuki takayuki」代表

1975年生まれ 愛知県出身。東京造形大学卒業。2002年、ファッションブランド「suzuki takayuki」を立ち上げ、以後、国内外でコレクションを発表し続けている。「宇多田ヒカル」「森山直太朗」「嵐」などへの衣装提供、その他、演劇、映画、ダンスなど舞台関係での衣装製作、舞台美術等の空間演出なども精力的に行なうなど、布や衣服に関わる多くの活動を行なっている。また、「仕立て屋のサーカス」のメンバーとして、ライブパフォーマンスも行っている。

北海道根室市と東京の2拠点から精力的な創作活動を展開、常に新しい可能性を求め活躍している。2016年9月、情熱大陸(MBS)出演。

www.suzukitakayuki.com

着る物に拘りのない興味は演劇の学生時代
学内イベントで初めて漫画付きソーイングへの挑戦
何かモノを作っていくことが仕事になる筈と思いつむ
地下鉄のレール公民館の蛍光灯を換え続ける謎のバイトも
作品の中に世界を創る舞台衣装を担当する

隙間をつくり 人が着て 自然の中で命と向き合い

服のイメージは頭の中にポコンと出来る完成図
勝負するのはネームバリューではなく着心地の良さ
重要なのは順位の1位ではなく一番大切なものを明確にすること
コンセプトは時間の存在を意識できる服
人が着るって何て素敵なことだろう…



山中 崇氏

俳優

1978年生まれ 東京都出身。東京経済大学コミュニケーション学部卒業。
岡本太郎の『自分の中に毒を持って』に刺激を受け芝居の道に進むことを決意。
舞台では、野田秀樹、飴屋法水、松本雄吉ら演出家の作品に出演。映画『松ヶ根
乱射事件』でクセのある男の役に挑戦、以降はクセのある役のオファーが増える。
2013年、連続テレビ小説『ごちそうさん』での室井幸斎を演じて当たり役となる。
その他、NHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』『おんな城主 直虎』、連続テレビ小説『ち
むどんどん』、スペシャルドラマ『洞窟おじさん』、土曜ドラマ『パーセント』な
ど、テレビ、映画、舞台など多数出演。なくてはならない個性的な脇役として存
在感を発揮している。5/24公開の『三日月とネコ』にも出演中。

宇野亞喜良さんと出会い
舞台衣装の道へ

山中 本日は、ファッションデザイナーのスズキタカユキさんを指名させて頂きました。宜しくお願いします。

スズキ こちらこそ、宜しくお願いします。

山中 スズキさんと最初にお会いしたのは、2014年、東京芸術劇場での『小指の思い出』という舞台で、僕はひとりの俳優として参加していました。スズキさんは衣装を担当されていましたが、スズキさんがメインキャストではなかった自分に話しかけてくれたことが、とにかく嬉しくてすごく覚えてます。何か理由があったのですか？

スズキ 僕は演劇、映画、ミュージシャン関係の方の衣装などもかなりやっていたので、作品にすごく興味がありました。特に演劇は高校生の頃からすごく好きで、学生時代、多少演劇に関わっていた時もあった、山中さんと同じ事務所の松重豊さ



スズキタカユキ氏

んも出ておられてとても思い入れのある舞台だったのです。そんな山中さんが演出家からの要望などがあつた時に、試行錯誤して毎回いろんな工夫をしたり、その場面の雰囲気や掴もうとか、ストーリーを様々な解釈をして自分なりに表現しようとしているのがすごく光っていて、とても熱量を感じたというか素晴らしいなと思ったことを伝えたくて……。

山中 嬉しいなあ。そうでしたか。どこで誰に見られてるか……。ほんと、手を抜いてはいけませんね。嬉しいです。

スズキ 今だから言いますが、凄

く良かった。お客様は本番しか観ませんが、僕らはリハーサルを何度か観るのでその変化が凄く良くて、素敵な役者さんだなと思いました。

山中 その時着せていただいた洋服がカッコ良くて動きやすくて着心地が良かったのですが、その時「好きなように着て下さい。破れたら破れたままでもいいし、それは『味だから』とおっしゃっていたのが印象的でした。洋服に対して、機能性と美しさのバランスをどういう風に捉えているのですか？

スズキ 舞台のことで言えば、まずは「いい作品を創りたい」と思っているの、洋服が目立てばいいと

いう訳でもなく、逆に「洋服が良かった」という感想をもらう舞台はあまりよくないというか、失敗だと思っています。作品として良かった、というのがとてもいい反応だと思っています。要するに、一番重要なのは作品の中でリアリティを作りたい、それは仮定の現実ではあるけれど、そこにちゃんと世界があつてリアルがあるからこそ、お客さんが見ていて感動したり、自分を投影したりできると思っています。ただ服を綺麗に見せたいとか衣装をちゃんと見せたいということではなく、その作品の中に「世界」を創りたい、どういう現実が動いているのかを表現したいと思っています。だから、破れることもあるだろうしクシヤクシヤになることもあるだろうしね。

山中 演劇とか、ダンスなどの舞台衣装と、お客様に「売れるもの」としての洋服の捉え方は、また違いますか？

スズキ ちよつと違いますが同じくらい上で、違う所をピックアップしている感じだと思います。うちの洋服はデザイナーブランドとしては、実はちよつと弱い、わざと

弱くしているのですが、パツと見て分かる分り易さではなく、自分らしさみたいなものの方が、その人の生活や日常の中に洋服が溶け込めると思っています。だから、映画やドラマで着ていただく機会が比較的多いのはそういうことなのかと思っ
ています。分り易いデザイナーズブランドになり過ぎない。要は、主役は服ではなくその人で、その人が日々生活していく中に溶け込んでいきたい、というのがお店に置いている服のパターンです。

山中 タグも、わざと取れやすくなっている、ブランドを主張していいですね。

スズキ お客様にお渡しする迄は僕らの責任ですが、その先は一緒にその人なりのものを作って頂くって頂きたいと思ってるので、ブランドを主張し過ぎる必要はないという意識はあるかもしれないですね。極端な話、勝負するのはネームバリューではなくて、現実にはそれがいいものなのかどうか、着て下さる方にとって心地良きかなのか……。名前が大事な時もあると思いますが、名前を出すことが1位にはならないですよ。



山中 崇氏

ね。1位はうちの服を望んで下さっている方に、いい答えをちゃんと出しているか、ということだと思えます。

山中 独学で縫うことを始めたきっかけは何ですか？

スズキ 美術系の大学でしたが、自分で作ることは全く考えていませんでした。社会全体が洋服に憧れを持っていた学生時代は、校内でファッションショーや様々なイベントが盛んで、そんなイベントに「人手が足りないから、何か作ってよ」と先輩に言われて、やり始めたのが最初です。服飾を習っていたわけでもなく。

山中 ええーっ……！それが最初ですか！？何も知らずに？

スズキ そう、未だに持っています。「初めてのソーイング（マンガ付き）」みたいなのを見て、「おお、こうやって作るのか」とか、自分の服をバラして「こういう構造なのか」とか。

山中 あっはっはっは。いわゆる型紙みたいな……。それ、大学生の時ですよ？その先輩に言われなかつたら服は作ってないですね。

スズキ 全くやってないと思います。その一声と、あとは周りに友達がいってくれたから今、やれていると思いますね。当時作ったのは雰囲気

があつて質感のある服でした。

山中 それは文化祭の時に誰かが着てファッションショーみたいなことをやったのですね。周りの人達の感想はどうでしたか？

スズキ どうだったかなあ……？（笑）何か褒めてもらったような気がします。

山中 その経験があつて、何かしらの手応えを感じたのですか？

スズキ そこまでは感じてなかったと思いますが、その後、現在でも靴のデザイナーとして活躍している友人やアート系の絵を描く友人達と何回か展示会をやっていく内に、感触を得たような気がします。でも、ホントのホントのきっかけは2回目の展示会の時にイラストレーターの宇野亞喜良さんがふらっと来られたこととです。

山中 ええっ、超大御所ですね。

スズキ ちょうど今、東京オペラシティのアートギャラリーで展示会をやっておられますね。それこそ紫綬褒章を受章されていて、寺山修司さんと一緒にずっとやっておられた宇野さんが「ちよっと一緒に何かやってみよっか」みたいなことを言って

下さって。僕はその時まで宇野さんを直接存じ上げてなかったのですが、「あつ、何とかやれるかな」みたいな気持ちになりましたね。

山中 宇野さんとの出会いが大きかったですね。

スズキ それで現在に繋がるお仕事をいくつか広げて頂いたと思います。でも、宇野さんに声をかけてもらいましたがすぐに仕事になった訳ではなく、その間に卒業して就職……の状況。でも、自分としては「何かモノを作っていくことが仕事になる筈だ」「出来る所までは自分の力を試してみたい」と、若さで思い込んでいましたね。

山中 とところでどの辺りから仕事になったのですか？アルバイトはされましたか？

スズキ しましたよ。地下鉄のレールを交換する、みたいな。今はもうレールも変わったと思いますが、渋谷から表参道のレールの上にある、電気を通すヤツの交換とか、公民館の蛍光灯をひたすら換え続ける謎の仕事です。それをやりながら自分で作品を作って、いろいろな人に見てもらったりしていました。生活はギ

リギリで、多分、浮浪者みたいな感じだったと思いますね。宇野さんが拾ってくれた、そういう感じですよ。

山中 いわゆる就職をしない、というところに親御さんの「反対」はなかったですか？

スズキ 多分、諦めてたのかも（笑）公務員の父とパートに出る母という普通の家庭で、姉と妹がいますが、姉が金沢美術工芸大学に入ったこともあって、僕が美術系の大学に行くことにも全く反対ではなかったですね。本当にありがたいと思ってるのは、姉も僕も（笑）すごく絵が上手だったので、幼稚園の先生が「この2人は、才能があるかもしれないから絵画教室に通わせた方がいい」と進言してくれたらしく、ちょっとその気になった親が絵画教室に通わせてくれたので、少し親は免疫ができたのだと思いますよ。姉が美術系の学校に行く決めて、デッサンや、もう少し本格的に美術の勉強を始めて、「あ、自分もそれがいいかも」みたいな思ってた。

山中 お姉さんが先を歩いてくれたから、実感としてその方が分かり易かった……。

スズキ 自分は手を動かすのが好きだったし、姉のおかげもあるとは思いますが、いますね。

「社会」と密接に関係するファッションの在り方

山中 幼い頃、自分が着る洋服にこだわりみたいなものはありましたか？

スズキ これが、殆どなくて。高校3年とか大学1、2年には「ブランドの服を着たい」と。でも今思うと大したこだわりじゃないですね（笑）

山中 普段はどんな格好をしていましたか？

スズキ 最初は当時で言うところのアメカジみたいな感じですよ。今とあまり変わってはいない、変わったのは体型だけです（笑）古着もちょっとかじった程度です。

山中 それは地元のお店ですか？東京まで買いに来ることはしなかったのですか？

スズキ そこまではしなかったけど、松重さんの舞台は東京まで観に来てた（笑）自分が衣装をやる時は全く思ってたので、不思議な

巡り合わせだなあと感じますね。
山中 どの時点で「衣装でやれる」「服飾で食べていく」と思うようになりましたか？

スズキ ちよつと特殊だと思いますが、ある意味で「運」がいいと思います。リーマンショックや地震の時などは多少打撃を受けましたがジワジワと良くなっている、最初から。

山中 それは、売上げのことで

すか？
スズキ そうです。環境も含めて全体が良くなってきました。今でも少し不安はあるし、最初から「ある程度イケる」と思っていた部分もあってちよつと難しいのですが、全く何も知らない状態で始めて、徐々に現在に繋がっている状態で。明確な「ここ」というのはないですね。

山中 例えば『情熱大陸』に出演されたり、オリンピックの開会式のオープニングとかを手掛けたりして、「もう、俺、いったな」みたいなのは本当にないですか？ ごめんなさい、こんな下世話なこと（笑）
スズキ うちはとても不思議なブランドで、良くも悪くもその影響を受けないですね。売上げがドーンと

上がることはないし、ドーンと下がることもない、ジワジワくるのが特徴かも。

山中 スズキタカユキブランドが静かに浸透している、ということですね。スズキさんの洋服が好きで衣装合わせの時も普通に着て行ってるね」とか共演者の方達から良く聞かれますよ。

スズキ わあ、嬉しいなあ。極端な話、どうなるかちよつと分らない世界だと思えます。うちは比較的安定的ですが、ファッション業界は売れる時があれば全く売れない時もある。極端な話をするブランドというブランドが何年続くのか、恐らく10年続くブランドはそうそうないですよ。そういう中に自分がある、という人は分かっています。ただ、ある程度の人から求められているという実感は、どこかでは出ていたと思います。多分、宇野さんと何年かやって僕もある程度の区切りもついて、宇野さんだけだった所から少し離れた時、それまでに関わりがあった方から結構オファーを頂くようになったのが、自分の中で「何とかな

るのかな」と思ったタイミングかもしれませぬ。

山中 僕らが学生の時、当時有名なブランドは店舗があつて、原宿のどこここにあつてとか、そこに買いに行くのもステータスの感じがありましたよね。スズキさんは、アトリエはあるけど実店舗をお持ちではないでしょ。実店舗を持つと考えるとそれはありますか？

スズキ 昔、渋谷のバルコにお店を出していた時期もありますよ。ただ、できるだけ、今迄と違うやり方をしたいとは思っています。と言うのは、アパレル自体は経済がグッと上がって行く時にはまず、最初に欲しがられるものだったりするので非常に盛り上がりますが、安定期になると、趣味の部分や他のジャンルに分散されるのでちよつと落ちます。

山中 そうですか。
スズキ 今、日本ではそれ程調子がいいブランドは少ないと思えます。極端な話、洋服が伝わってから100年ぐらいで、この何十年かで培ってきた事業としての形態は、実はあまり上手くいっていない。こんなことを言うと怒られますが、アパ

レル業界でベータシックにやっている手法は、時代に合っていないで限界を越えているのが分かりきっているのです。自分達はその次の時代に対してのアプローチをしたシステムを作らないといけない、まあ、違う事をやれば良いという訳ではなく、自分達に合ったやり方を作っていくか、といけません。そういう意味では、実店舗を持つていろいろとやっていくというのは、今のタイミングではないかなあ、という感じですね。

山中 スズキさんが愛知の学生だった頃は東京までわざわざ買いに行かないといけなかったのに、今では簡単にネットで買えるし、流通も消費の形も大きく変わりましたよね。実店舗を持たなくてもやっていけると読んでいたのですか。

スズキ 読んでいたという訳ではないのですが……。もちろん、店舗を持つた方がいい部分も多くて面白いのですが、事業をしているというのは、ニーズがあつて自分達がやりたい事をやっている訳で、何かに縛られて我慢しながらというのは違うと思っています。その上で、やりたい事を大切にしながら続けていくには

どうしたらいいのか、というベクトルで考えると、実店舗に今はそれ程必然性を感じていません。「目標があるの、そこまで伸ばしましょう」という考え方なので、必然的にやり方が定まってくるという感覚でしょうか。

山中 先日、関根光才こうさいさんが撮った『燃えるドレスを紡いで』というドキュメンタリー映画を観たのですが、世界で作られている洋服の75%が廃棄され、それがケニアのナイロビに迄流れていって、燃やされるか、埋められるかという現実と、地球の温暖化、環境破壊の原因となっている第1位が石油産業、第2位がアパレル産業だ、ということに衝撃を受けました。まずパリコレというものがあつて、そこが常にファッションをリードしていて、例えば今年の色はこれだ、デザインはこれだ、というのに周りが倣つていくという流れの中で、常に春夏と秋冬の年2回の更新をしなければいけない……。スズキさんは「これから」とか「繋げていく」為に、こういった現実をどういう風に捉えておられますか？

スズキ 全ては、「社会」と密接な

関係性がありますよね。ファッションは、目には見えない「今」っぽさ」と言うか「トレンド」という言葉が合っているかどうか分りませんが、そういうものを何となく社会が感じているので、昔の服は「ちょっと古臭いな」と思ってしまうのです。僕は、それを求めて下さっている方と自分達、作る人達の関係性の中で、どういう循環を生むかということがすごく重要だと思っています。

山中 そうですね。

スズキ ファッションの構造も、需要と供給のバランスを自分達でちゃんと取りながら、長期間かけて継続して作っていく。商品を廃棄しない為になんか風にならなくていいのか、作っていく過程で無駄をなくすには製作の仕方をどのようにしていくのか、そこが目指すべきポイントだと思っています。そして様々な地域の人々が評価してくれて受け容れてくれる。要するに、パリを否定している訳ではありませんが、今、自分達がやりたくて価値があると信じる部分をちゃんと作って、その延長上に広げていくというやり方が一番いいと思っています。もちろん、需要をど



う生むかという方向もありますが「どう、服を作るのか」もかなり重要です。日本でも縫える人達が減って生産基地としてはどんどん薄くなって、「Made in Japan」として作れるものがどこまであるのか、ということなんです。でも、良いものを長く作りたいのでできるだけそういう人達を国内に置いておきたいですね。見えない人に対して「売りたい」とは、あまり思っていない。

山中 「パリコレに出たい」という願望はないですか。

スズキ パリの展示会に出していた時期もあったし、また海外に出していく展開を今後考えていますが、「パリでファッションショーをやって、出していこう」というのとは、

ちょっと違うかもしれませんね。
山中 スズキさんの服はあまり流行に左右されない普遍的な感じがしますが、製作する上でパリコレに対して常に意識はしますか？

スズキ 何が流行っているのだろう、とか、何が売れそうなのか、という意識でパリを見ることはあまりありませんが、とは言え、多くの人々が集まってくる世界最高峰の舞台なので、面白いものを生み出そうというエネルギーや、何かすごく価値のあることをやっているのを知っておくことは重要です。そこで自分がどういう事をやるかが重要ですが、うちの場合、そういうトレンド感とか流れに乗せて出していこうということにあまりプライオリティを置いていない。

山中 何かで読みましたが、ファッションにはサイクルがあって循環してくるから、僕らが高校時代に流行ったものを今の若者も着ていたりして、移り変わりが激しい世の中で残っていくブランドは本当に少ない。その中で20年以上というのは凄いですよ。

スズキ 逆に言うとうちのブランド

はある程度世界観があって、その世界観の中で変化していくので、毎シーズン、ガラッと全体を変えたり、変に「これを新しく出そう」と固執していないから続いているのかもしれない。

山中 どういう時に洋服のイメージが湧くのですか？

スズキ あー……、いつでもですね。デザイナーの人それぞれだと思いますが、僕は頭の中にポコンと完成図ができるタイプで、「これを作るにはこの生地で、このシルエットでこのボタンで」という風に、より具現化していくタイプかな。常にオンの状態なので何か分らない絵を描いている時は、それだと思って下さい（笑）それをいろいろ貯めておいて、時期によって編集し直す感じですね。

山中 演劇の作家さんや映画の方、本を書く人など、産みの苦しみをたいたことがある方もいますが、どこまでも泉のように湧いてくるのですか？大元の源泉みたいなものは、あるのですか？

スズキ それが全くなって、どうしようもないということはないか

な。

山中 それがあつてどう具現化しようか、というアプローチの仕方で悩んだりすることはある……けど、ということですか？

スズキ 結局、そこが洋服の面白いところで、作品性もあれば汎用性というか、流通させていくことも考えます。流通させなくてもいいけれど、今、自分達はある程度流通させていくことを頭に置いているので、ポコッと浮かんだものを1個しか作れませんが、これではマズい。まあマズくはないけれど、どうやったらそれを、このくらいの値段に収まるようにできるか、この人に縫ってもらうと大体1日に何枚ぐらいかな、と考えていくのが結構大変です。

山中 今年のトレンドカラーとか発表されますが、スズキさんの服はほぼ関係ない雰囲気ですね。それでも、そういうカラーのトレンドが出た時は多少影響されますか？

スズキ そうですねえ、社会との関係性があるので、多少は影響があると思います。ただ、目的としてちょっと違うのは、仕事ですから、もちろん売れないと困ります。当たり前前

ですが、1枚しか売れませんでしたとなると、社員にお給料を払えませんからマズいのですが、かと言って、売る為に服を作っているのかという

とそうではなく、最も重要なのは着て下さった方がとても心地いいと感じたり、喜んで頂くことと、自分達が作りたいものとの距離が近くなっていくといいわけですね。その為に作っているんです。意識はしないけれど、判っていないといけない。判っていることによつて、自分達が出す色が社会にどう評価されるのかが変わってきます。ただ、それが何かに影響することはあまりないと思います。売れることは大事だけど売ることが第1目標にはならない、第2位ぐらい(笑)。どう転んでも1位にはならないです。

山中 スズキさんの服は、着た人に馴染む、その人に寄り添うような洋服で、ご自身が着たい服ということではないのですか。

スズキ ……そうですね。自分がいいと思ってる服は作っています。自分が着たい服かと訊かれるとちょっと違うかもしれません。

山中 スズキさんと知り合つて10年

程経ちますが、ほぼ、同じスタイルですよ(笑)。ジーパンに、黒Tシャツ。

スズキ そうですね。元々レディースの服から始めたので、着せたいというか着てもらえるといいなとかね。最初はもつと作品的な服で、人が着るといふよりはそのモノがかっこいいかどうか、価値があるかどうかを中心に考えていました。でも続けていく過程で「人が着るって何て素敵なことなんだろう」と思うようになって、今は人が着て完成する服を作りたいと思つています。服だけで100%にならないように、隙間を作っておく……。なので、今は、自分が着るといふより着てもらつて、「とても、良い」と思つてもらふことが重要です。

山中 素敵な言葉ですね。そう思うのには何かあつたのですか？

スズキ 洋服というのは人が着るものですよ。もちろん飾つておいてもいいのですが、着るのを前提に作っているの着てもらうシーンが増えるわけです。大学時代に作つたものや宇野さんに見てもらつたものはギャラリーに「展示」していただいて、誰も着ない。展示されるのが最終形態で作つていたものが、宇野さんとの出会いで「じゃあ、着せてみましょう」となつて、ダンサーの人に、役者さんという風になつてくると、「着る」ということが大前提で附いて回るようになってきます。

山中 それから変わりましたか。

スズキ その後、様々な衣装を担当したり、ブランドをやり始めようとなつた場合に「着る」ということの要素が自分の中でどんどん強くなつて、「着ることを前提に考えていくことが、もしかしたら面白いのでは」と思う様になつて……。「ブランドの特徴が強い方がいい服なのか、ちょっとよく判らない」というのは、そういうところで、人がサツと着る時にその人が自然体でかっこ



よく見える姿というのは、僕のエゴをおつけたものとは違うのでは、と思っ
ています。もちろん、自分なりの美意識があつて服を作っているの
でそこは共有したいと思ひますが、
そういう隙間がちょっとあつた方が
いいのかな、と。

山中 スズキさんのブランドのコン
セプトは「時間と調和」「過去、現在、
未来を見て」とありますが、分かり
易く言うとはどんな感じですか？

スズキ いろいろ解釈の仕方があり
ますが、時間の存在を意識できる服
がいいと思っています。それはとて
も手を尽くして作られたもの、とか、
職人さんの想いなどが何か感じられ
るもの、さらに言うと、自分が着て
経年変化して味が出てきたり、自分
の身体に馴染んで一緒に育つてくれ
るというか、一緒に同じ時間を過
していける服であつてほしいので
す。又、しばらく着なくても自分の
中の琴線に触れてしまつておいて、
ふと10年後に触れた時、自分の過
した10年を思い返し意識するとか。
「時間」というふわつとしたもの
存在を少し意識させてくれるような
服がいい服だと思っています。

山中 「過去、現在、未来」という
のは、経年もあると思ひますが、古
着屋さんみたいなものは、どうい
う風に捉えていますか？

スズキ 面白いと思ひますね。洋服
はとてもふわつとしていて、様々な要
素を内包する懐の深さがあります。だ
から新品も良いし古いものも良い、テ
イラードのようにカチツとした服もあ
れば、Tシャツにプリントした服も
あつて、その振れ幅の広さが洋服のす
ごく面白いところだと思ひています。
新しいモノでも古いモノでも良いもの
はある。結局その中でバランスを取
つて生活していくことが、多分最終的に
良い社会になつていくポイントなのだ
と思ひます。善悪を極端に判断せず、
良い所をヒックアップしてそれを融合
させていく、そういう意味では古着は
大好きですし、古着が流通していくこ
とはいいことだと思ひますね。着てい
た人の意識とちよつと繋がれるとい
うのも楽しいですよ。

「逃げない」ために 自分で選択し続ける

山中 現在、北海道の根室と東京の

二拠点で生活されて、冬の厳しい自
然を体験して「生きていることを実
感した」とおっしゃっていますか、
こういう柔らかなモノを扱いながら
厳しい所で生きていくという実感と
いうものが、スズキさんの人間的な
温かさや、強さに繋がっていくのか
なと思ひます。北海道の自然の中
身を置くのと、この表参道にスベ
スを持つのと、その両方で生きて
ファッションを生み出していく辺り
も興味深いです。

スズキ 最近あまり行くことがで
きませんが根室に家を借りていま
す。僕は愛知県の岡崎で生まれて、
まあ田舎ですが地方の第4、第5都
市みたいな感じの温暖な環境で、そ
の後大学入学をきっかけにこの凄
街、東京にいます。根室とい
う所は北海道の中ではそれ程厳しく
ないとは言え、冬はマイナス15度と
か20度になる、土地が広大でヒグマ
がいたり大きな野生動物がいること
で、生命の危険性を感じます。いく
つかのミスが重なる生命の危険に
晒される所に住んでいくと、自分の
生命をちゃんと感じるというか、き
ちんと生きていかないと駄目だなと

思えてすごく良かったと思ひます。
結局人は想像力や自分の体験したこ
とから派生する創造力で鍛えていか
ないと、自分勝手な生き方をし
まうだろうということに気づけたこ
とが一番良かったのかなと。

山中 気づきがあつたのですか。
スズキ だから、東京だけでモノづ
くりをすることがいいとも思わな
いし、根室だからいいというのではあ
りません。いろいろな所の人達と交
流をして、多くの人達との関係性で、
自分がちゃんと社会というか、地球
の中で生きていくことを認識できて
いるかどうかが重要だと思ひます。
そうすると、大事なものは本当に大
事で、良くない事は本当に良くない
ということが現実味を持つて捉えら
れる……。そういう意味では、違う
場所での生活をしたというのは、とて
も良かったと思ひています。
山中 きっかけは何ですか？
スズキ 釣り好きが高じて根室に先
に移住した友人がいて「いいぞ、い
いぞ」と言うので、騙されたと思つ
て試しに行つてみたら、とてもいい
場所です。本当に何も謎の場所な
のですが、それがとても良くて。緯



対談を終えて

山中 いいお話
を伺いました。
あるかもしれま
せん。
逆にこだわって
いるところ、こ
れだけは譲れな
いというものは

山中 最後にひとつ、10年前にスズ
キさんが僕に声をかけて下さったこ
ろ、
「いいお話
を伺いました。
あるかもしれま
せん。」
逆にこだわって
いるところ、こ
れだけは譲れな
いというものは

山中 素敵なお話をありがとうございます
でした。
スズキ こちらこそ、ありがとござ
いました。
逆にこだわって
いるところ、こ
れだけは譲れな
いというものは

度も高いので光もちらとは違いま
すし……ね。
山中 スズキさんは自由人なのか
……。変化に富んだ事が好きなのか
……。先入観に囚われたり執着しな
かったり。現代の人に欠けている部
分を非常に豊かにお持ちのようです
が、それはどこから生まれてきたの
でしょう。
スズキ これは仕事とか自分がやっ
ている全ての事に繋がるのですが、
最も重要なのは、一番大切な事は何
なのかを意識するようにしていま
す。1位が何なのかをちゃんと理解
していないと、結局2位、3位を
取って1位を失くしてしまう可能性

があります。極端な話をすると、1
位をちゃんと掴んでおけば2位、3
位はどちらでもいい、もちろん掴め
るに越したことはないですが、自分
にとつての1位は、今のところ、い
い服を作つて喜んで着てもらうこと
です。「そこを外さなければあと
捨てるがいい」という割り切りがある
のだと思います。「全部欲しい」と
はならないですね。
山中 そこが執着のないところであ
りませんか。
スズキ 1位を取れない時もありま
すが、ただ、目指すのは1位、順位
の1位ではなくて自分が一番大切だ
と思うものを明確にしておく、それ
によつて、それ

以外
の事に執着
を生ませなく
す
と意識は
あるかもしれ
せん。
逆にこだわって
いるところ、こ
れだけは譲れな
いというものは

とが本当に嬉しくて、その時の自分
にそういう方が声をかけてくれたこ
とがものすごく強い支えになったの
で、スズキさんが、これから服とか
こういう業界を志す若者に対して、
何かかける言葉があるとしたら教え
てほしいのですが。
スズキ 難しいね……うーん、志す
人に対して、か……。個人的には、是
非多くの人に服作りをやつてほしいと
思います。大変だけど(笑) 服つてと
ても素晴らしいものだし、どんな好
きになってほしい、どんなジャンルで
もそうだけど、自分がやつてい
る事、
スズキ 少ないから自分の周りにい
る人とか、何か関わりを持った人達
が「いい社会だな」とか「生きてるつ
て結構楽しいな」と思えるものを服
で伝えていきたいですね。自分達の
会社ではない人も含めてそういう価
値観を創つていかないとと思つてい
ます。今までより、それがより現実
的になつて社会全体が比較的幸福感
と思える仕組みを、出来るだけ作つ
ていきたいというのが、ここ10年、
ではないでしょうか。